

与島風景美術館 ―石と対峙する内包の森―

1210168 村上勇彦

指導教員 渡辺菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 背景

与島は香川県坂出市の瀬戸内海に浮かぶ島の一つであり、江戸時代から採石業で栄えた。その後、瀬戸大橋の建設に伴って橋脚やパーキングエリア、観光施設に土地を譲渡するかたちで採石業は廃業し、瀬戸大橋開通後に期待した観光業も数年で廃れてしまい人口流出が続いている。

現在は採石場、観光施設等の跡地がただ放置されてしまっている。採石業で栄えたこと、その後20世紀に激動の空間変容をこうむったこと、これらの歴史を放置するのではなく、各時代の空間価値を認め高め合い、かつ与島の歴史を空間的に省察できる場所ができないか考えた。

2. 目的

本設計は与島風景美術館を設計することを目的とする。与島風景美術館では、風景としての採石場跡地と、それに対峙する内部空間化された森を中核に据える。森の空間を導入したのは採石以前には島が森に覆われていたと推測できるからである。森→石→(現代の象徴である)瀬戸大橋の三風景で構成される美術館とする。原点の森と石の空間を対峙させ、その先に現代がある構成を考える。

次に風景美術館についてである。風景美術館とは風景の魅力ある特色に呼応し、外部造形と内部造形の双方において、その魅力を加速させる建築のことである。一般的な美術館は美術価値を持つ展示品を見せるための容れものであるのに対し、風景美術館は「美術館とともにある風景」と「美術館の内部空間を介して見る風景」そのものが美術的価値を持つまでに高められる建築のことである。

ここでは、森を内包する美術館空間と採石の風景、さらには瀬戸大橋の風景の三者の風景価値を互いに高めあうことが目指される。

3. 設計指針

設計指針を以下に掲げる。

- I) 与島の古今の風景要素を建築的操作で再構築し、魅力的風景に転じる。古今の風景要素とは以下の通りである。
 - A) 原点としての森
 - B) 採石空間
 - C) 瀬戸大橋
- II) 原点の森を内包し石と対峙する美術館
- III) 瀬戸大橋により現代にはじまり現代に帰還できる空間

4. 設計方法

0) 敷地の選定

- 1) 古今の風景要素による内部構成と歴史資料スペースが併存する空間設計
- 2) 森の象徴としての木架構表現と石が対峙する空間設計
- 3) 現代空間：瀬戸大橋を活用した導入空間と、最終風景の設計

5. 設計内容

5-0 敷地の選定

与島の北西部に位置する池周辺を対象敷地とする(図1)。対象敷地では古今の風景として採石跡地とそこに雨水が溜まってできた池、瀬戸大橋が一望できる。しかし、この場所はパーキングエリアを起点にした場合、奥地と言える場所であり気づきにくい。美術館の配置を通して改めて発見される場所として設計する。



図1 対象敷地



図2 敷地写真

* 国土地理院地図に方位を追記して掲載

5-1 古今の風景要素による内部構成

与島を知るために古今の風景要素を歴史順に体験することができるように内部を構成する。

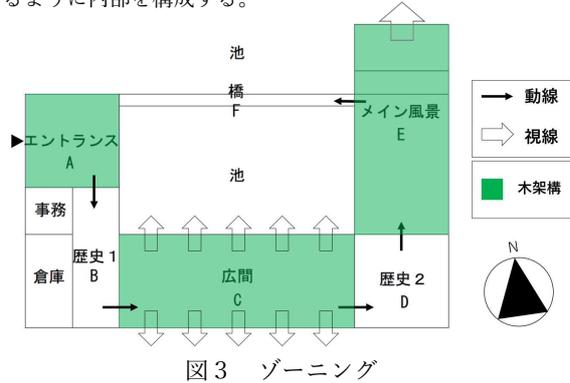


図3 ズーニング

- A エントランスは原点としての森(木架構)空間とする。
- B 歴史資料スペースを森の内部空間で挟むように併設し、与島の歴史を知る前後で内部空間の体験に変化を与える。(Dも同様の役割を持つ)
- C 森と橋や石と断片的に対峙する空間とする。木架構の柱が並ぶ森空間で屋根方向により風景への視線誘導をおこなう。こうすることで奥への抑制を行い、静的広がりとしての森にいるような空間とする。

南側では瀬戸内海の風景を眺めることができ、奥に行くにつれて徐々に草木から岩肌が見えるようになり最終的には岩を間近で感じることができる。



図4 南側風景

北側では、瀬戸大橋のみの風景が眺められる。その手前に美術館の橋が架かっており、人が歩いているのを見ることで対比による瀬戸大橋の大きさや印象をより強めることができる。



図5 北側風景

風景が断片的に見えることで森から現在に変わっていく中間的ポジションを担う空間とする。



図6 メイン風景

- E 一軸空間の先に現代の風景(瀬戸大橋)を遠景として眺めることで原点の森から採石を経て、現

代に至る与島全歴史を一望のもとに把握する。ここでは、奥までいかずに途中で離脱することで木架構にフレーミングされた現代風景を眺めることができる。

- F 離脱した後に余韻にひたりながら橋を渡り、周辺風景を眺めつつエントランスに戻る。

5-2 木架構表現と石との対峙

木架構はトラス構造を用いて図7を基本とし、要求される空間効果に応じて組み替える。木の枝が上に伸びている様子を表現し、複数並べることで森を象徴する空間とした。

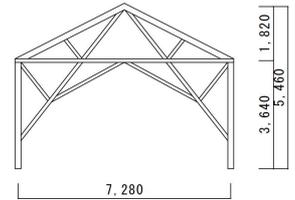


図7 トラス構造

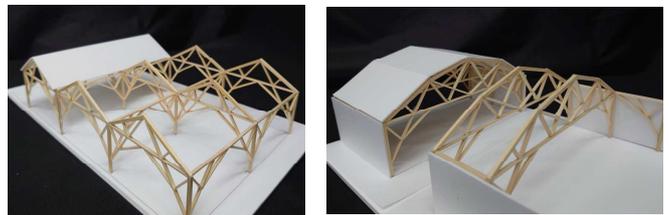


図8 木架構(C)

図9 木架構(E)

5-3 時間の可視化

美術館へのアプローチとして瀬戸大橋の下をくぐり抜けると対象敷地の風景に出会うことができ、ここから風景美術館としての空間体験が始まる。美術館内で「内包の森」という島の原点的空間を体験したのちにメイン風景の採石空間と対面し、瀬戸大橋を遠景に見ることで現代の風景に戻る。全体を通して古今の空間が繋がるような体験をすることができる。

6. まとめ

与島風景美術館を設計することで与島全歴史を空間体験を通して感じる事が可能になった。風景美術館でつながった過去と現在が新しい与島の未来につながっていくことを願っている。

7. 引用・参考文献

国土地理院

<https://maps.gsi.go.jp/#18/34.391425/133.813693/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c0j0h0k0l0u0r0z0r0s0m0f1>